# 東地域まちづくり協議会だより　第26号

## 上庄川流域水防・治水についての学習

東地域まちづくり協議会　会長　大嶋　充

９月２９日（金）比美乃江小学校体育館において、「上庄川」を題材とし、水防及び流域治水についての学習が行われました。６年生の児童と東地域まちづくり協議会・富山県河川課・防災士・社会福祉協議会の皆様が参加しました。

これは、「東地域まちづくり計画書」に掲載している目標の中の一つである【「みんなで築こう」支え合い　助け合い　安心・安全な地域】の実践活動として実施したものです。このねらいは、避難訓練や交通安全活動を通して、子どもや高齢者を守るとともに、自らが安全を守ろうとする自覚を身に付けることです。

最近、想像を越える自然災害が全国各地で発生しています。特に、川の氾濫は、いつ・どこで発生しても不思議ではない、と言われています。

当日は、「流域治水」ということについて、分かりやすく説明してくださいました。気候変動により、水害が発生することが多くなってきました。これまでのような、川の管理者だけではなく、流域の人々や川に関係する人々が力を合わせ、主体的に防災・減災に取り組んでいくことが大切になってきました。具体的には、国・都道府県・市町村・住民が協働（力を合わせて）で災害を防ぎ、少しでも被害を少なくしようという取り組みが重要になってきたのです。

東地域まちづくり協議会では、各種の災害に対する心構えや行動について、今後とも児童生徒・各種団体と力を合わせ、協働の姿で取り組んでいくことにしております。各自が、いつも災害に遭ったらどのような行動をすればいいのか、という自分なりの避難行動計画を、考えておくことが大切ではないでしょうか。「まずは自分の命を守る。そして、周りの人の命を守る。」という自助・共助の姿を大切にし

ていきたいものです。「知識は命を守る。知識に基づいた行動は命を守る。」という言葉を忘れないようにしたいと思います。

## 【流域治水】について

**【流域って何？】**

雨や雪が河川に流れて入るすべての地域のことです。

**【治水って何？】**

水害を防ぐことです。どうやって防ぐのかというと、洪水（こうずい）の時の川の水位を下げることです。そこで、そのための対策を行うのです。

**【流域治水って何？】**

気候の変動によって、災害が大きくなったり頻繁（ひんぱん）に起きたりします。そこで、河川の管理者が中心となって、いろいろな対策を行います。また、その対策を一層すばやく実施します。

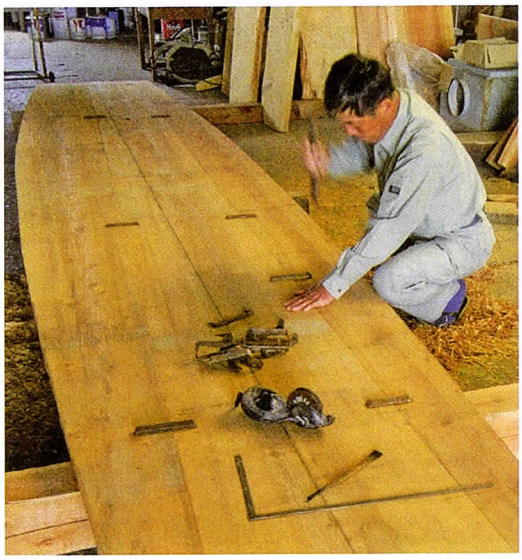
流域治水とは、氾濫（はんらん）している地域を含めて、一つの流域として考えることです。つまり、河川の流域にあたる全体のあらゆる関係者が、協働して水災対策を行うという考え方なのです。

## 東地域・氷見の魅力発見教室の続編

### 千年の技術を後世に！

### 加納町自治振興委員　番匠　光昭氏の紹介

番匠氏は、祖父の時代から続く船大工です。１５歳で船大工（ふなだいく）の世界に入りました。木造和船（もくぞうわせん）は「ドブネ」「テント」「テンマ」などと呼ばれ、船ごとに造り方に決まりがあり、板に十分の一の縮尺の船全体の基本線を書いて、後は頭の中の図面と経験をたよりに、自分の腕で仕上げるのです。この時代は、父親といっても、親方と弟子という厳しい関係だったそうです。



昭和３０年代は、能登（のと）から５・６人の船大工が働きに来るほど木造和船造りは盛んでしたが、４０年代に入ると繊維強化（せんいきょうか）プラスチック（ＦＲＰ）の船が普及し始めました。番匠光昭氏は、職人気質の父親の反対を押し切り、福井の造船会社で働きながら、詳しい図面を作成し、ＦＲＰ船の建造技術を学びました。５０年代はＦＲＰ船が中

心となり、自らの判断が正しかったと思う一方で、木造船が無くなることに少し寂しさを覚えたと振り返っています。

そのような時に、氷見市立博物館からの依頼で、全長が１５メートルの和船の船首部分のみの復元に取り組むことになりました。ドブネが現存する七尾に出向き寸法を測り、図面を作りました。その時こそ、船大工の血が騒いだそうです。

２００３年に、「和船建造技術を後世に伝える会」が結成されました。市内の遺跡から平安時代末期の建造と考えられる丸木舟の船材が出土したのがきっかけだったそうです。その調査の結果、船底は厚く、側面は薄く削られており、チョウナという道具を使った高い技術が分かってきました。しかし、このような千年続く技が、２１世紀には消滅の危機を迎えていました。

近年は、アートＮＰＯヒミングからの依頼で「テンマ船」を造り、現在ひみ漁業交流館で展示されています。今回の東地域・氷見の魅力発見教室では、番匠氏の「船大工の技術や木造和船をいつまでも残したい」という情熱と地域に根付いた素晴らしい技術・文化を改めて学ぶことができました。これは、東地域に住む私たちにとっては、貴重な体験でした。

## フィッシュレザー（魚の革製品）を世界に！
### サモアでの国際連合の活動

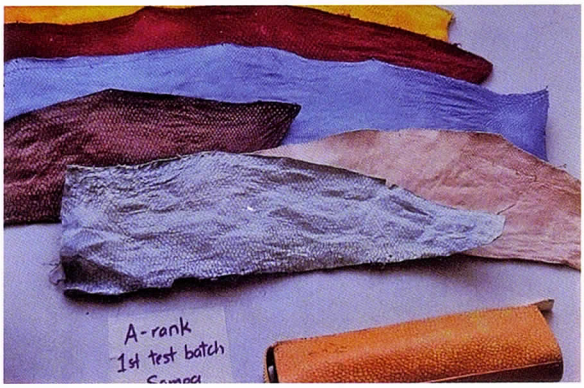
### 東地域まちづくり協議会　事務局長　野口　朋寿氏の紹介

本協議会事務局長の野口氏は、地域おこし協力隊員（東地域）として、イベント等の企画・運営に活躍して下さいました。また、魚の皮をなめして「フィッシュレザー（魚の革）に加工し、財布や名刺入れなどの製造を行っています。

この程、国連からの依頼で、南太平洋の島国・サモアの人々に革製品づくりや廃棄物の有効活用について指導に取り組んできました。サモアは、東京都の約１．３倍の独立国で、２，９３５平方キロメートルで人口が約２１８，７００人、民族はポリネ

シア系がほとんどだそうです。ニュージーランドの北２，３００キロ、ハワイ州の南３，７００キロメートルの南太平洋上の国です。飛行機で行くと、ニュージーランド経由で２０時間を要するそうです。

サモアは、漁業が盛んで魚の皮の有効活用が課題になっています。魚の食用部以外の大量廃棄が問題になっていました。野口氏は現地に滞在（たいざい）し、キハダマグロやメバチマグロ、シイラの皮加工に取り組みました。その結果、設備や道具が限られたなか、日本と同じ品質で加工ができることが確認できました。




将来は、キーホルダーや土産物、日用品などを安定的に製造・販売し、雇用の創出につなげていき、新たな産業として現地の人々の収入増に結びつけたいそうです。野口氏は、１０月にも再びサモアへ渡り、現地の人たちと試作製造に取り組みました。

このように、「東地域・氷見の魅力発見教室」では、番匠光昭氏から、和船を造る心・千年の技術を後世に伝えるという情熱を感じ取ることができました。また、私たちは、一旦見切りをつけた和船のよさを改めて知り、地域に根付いた文化でもある和船文化の伝承の大切さを学びました。

本協議会事務局長の野口朋寿氏は、サモアで国連開発計画の活動を通して、魚の革製品づくりや廃棄物の有効利用について、世界を股にかけ活躍しています。この活動は、国内外におけるＳＤＧｓ推進の貴重な事例として、今後ますます注目されていくのではないでしょうか。

野口氏は、次のように話して下さいました。「氷見で始めた小さな取り組みが、東地域の皆様のご協力があって、次第に広がっていくことを大変嬉しく思います。これからも地域の問題に取り組むとともに、ここ氷見で培った技術が広がるよう、頑張っていきたい。」

結びに、この記事を編集して、東地域のよさ・東地域の人々の素晴らしさについてお伝えすることができました。皆様方とともに、その魅力について末永く記憶にとどめたいと思います。